

## フランツ・リストと聖エリザベト －第1部、フランツ・リスト、その9－

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 粟 傷志・高田 昌実・上村 章  
 鹿児島大学 名誉教授 田島 紘己  
 加治木温泉病院 納 光弘  
 鹿児島市 夏越 祥次  
 粟 隆志

### [はじめに]

ここまで、バッハとロマン派の作曲家との係わり、特にショパンに関して、バッハに強くインスピレーションを受けたという、従来の定説とは真逆の私共の説（ショパンは本質的に、バッハの対極に立ち、バッハに特別の関心は持たなかった）を述べ、彼の真実の姿に迫ろうとしているが、ここでは、リスト、シューマン夫妻、モシュレスに言及する。

またピアノの普及につれ、音楽史の中に埋もれたチェンバロを、現代に蘇らせたワンド・ランドフスカ、および古楽器やバロック時代の演奏スタイルの研究や演奏に努めた、現代の演奏家に関しても若干述べる。

図75の左は、ヴァイマルのアルテンブル

グのリストの館の風景、中は、その部屋の大ペダル・ピアノフォルテと隣のモーツアルト所持の楽器、右はロマン派時代のパイプオルガンの演奏部で、複数の鍵盤と多数のストップにより、複雑な音の創造が可能。

### [4] ジョルジュ・サンド

(5) ジョルジュと破局後のショパン、晩年、  
 (付録) バッハとショパン、メンデルスゾーン、リスト、そしてカザルス、つづき  
 • フランツ・リスト(1811-1886)は、38年頃から48年まで、ピアノのヴィルトゥオーゾ、スーパースターとして演奏旅行に明け暮れたが、48年にヴァイマルの宮廷楽長として定住し、カロリーネと共に落ち着いた生活に

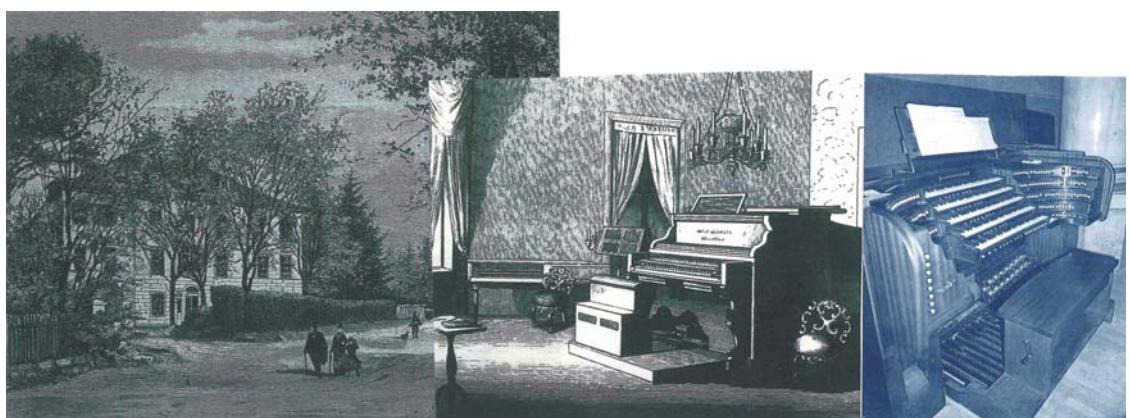


図75 ヴァイマルのリストの館とオルガン

左：リストの館（19世紀、ジョルダン画に基づく木版画）。

中：リストのピアノとオルガンの合体した巨大ペダル・ピアノフォルテ、その左はモーツアルト所持の楽器（1855年の木版画、図78に同じ）。

右：ヴィーン・コンツェルトハウスの大ホールのオルガン。

(LP: ORFEO, S125846G, 1983)

入った。

以後、祝典・式典、オペラなど演奏会の立案・企画、楽団員、合唱団員の訓練、作曲等を行う事になる。

50年には、ヴァーグナーの「ローエンゲリ  
ン」の世界初演も行った（なおヴェルディの  
「リゴレット」は51年。「椿姫」「トロヴァト  
レ」の初演は53年で同時期）。

リストによるバッハの編曲や、インスピレーションを得ての作曲は、50年より開始された。

ピアノ曲としては、「6つのオルガンの為の前奏曲とフーガ（演奏時間70分）」「バッハの主題による変奏曲」「バッハの名による幻想曲とフーガ」「涙し、嘆き、憂い、畏るる事

MARTIN HASELBÖCK: LISZT'S ORGAN WORKS

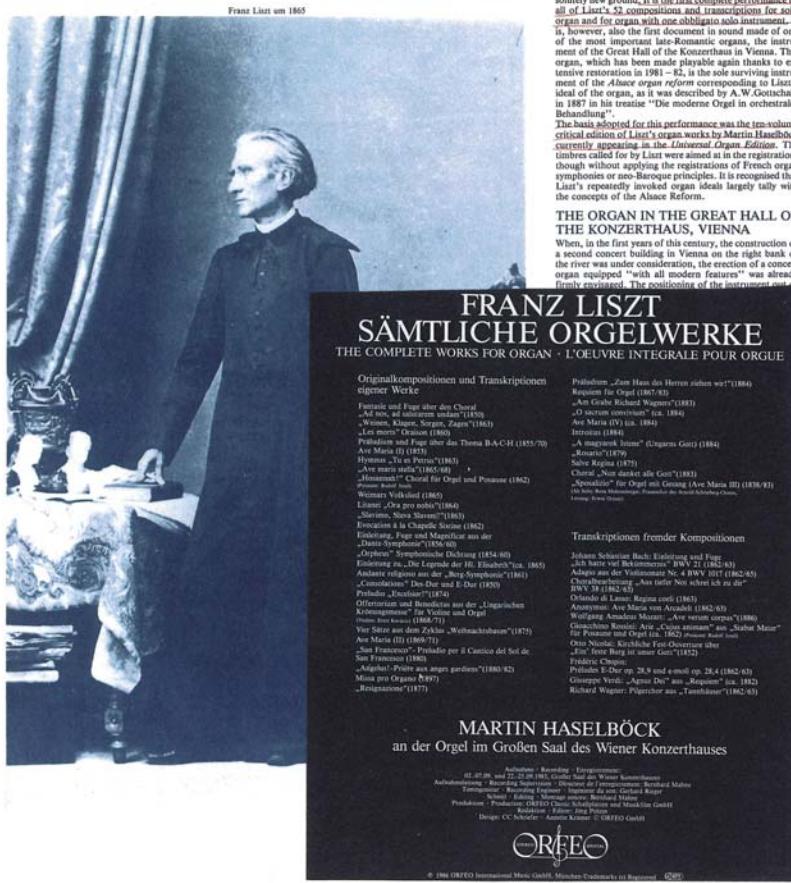


図76 神父アベ・リスト (1865) とオルガン曲目録  
(LP: ORFEO, 錄音1983)

通巻725号) 2022(令和4年)

# Franz Liszt (1811-1886)

## Sämtliche Werke für Orgel • Complete Organ Works

CD 1	CD 2	CD 3	CD 4
[01] Prélude und Fuge on 8-4-8	[01] Prélude "Excellent"	[01] Préludium "In domum domini	[01] Der Posa-Hymnus ..... 04:54
..... 13 : 10	[02] Am Grabe Richard Wagners ..... 02 : 31	[02] Ein Festspiel der Freude ..... 05 : 18	[02] Rhapsodie ..... 05 : 18
The Best Arrangements from Violin Sonata No. 4	[03] Introduction, Fugue and Magnificat from the Symphony for Church	[03] Toccata à la Chapelle Sixtine ..... 18 : 52	[03] Sonate des Preludes per il
BWV 107	[04] Introduction, Fugue and Magnificat from the Symphony for Church	[04] Ave Maria ..... 04 : 11	[04] Introduction to "Die Legende der
[05] Chorale Arrangement "Am Heilige See"	[05] Andante religioso ..... 01 : 45	[05] San Francesco ..... 05 : 27	[05] San Francesco
BWV 107	[06] Andante religioso ..... 05 : 07	[06] Diferuntum ..... 05 : 53	[06] Chiesa, Chiesa, Chiesa ..... 06 : 31
[07] Introduction and Fugue from the Cantata "Ich hatte viel Bekümmernis"	[07] Les Morts, Oration	[07] "Wie dunkel ist Gott!" ..... 07 : 38	[07] Chiesa, Chiesa, Chiesa
..... 04 : 44	[08] Toccata conviviale ..... 05 : 48	[08] Requieat, Confiteam ..... 02 : 42	[08] Chiesa, Chiesa, Chiesa
[09] Sinfonia	[09] 3 Consolations	[09] Salve, Salve, Salve ..... 02 : 24	[09] Chiesa, Chiesa, Chiesa
[10] Intrada	[10] Adagio (Comme IV)	[10] Ave Maria von Aszthai ..... 04 : 27	[10] Salutare pie Jesu! ..... 03 : 12
Misso pro organo	[11] Adagio (Comme V)	[11] 4 Transcriptions of Others' Works	[10] Sancte
[01] Kyrie	[12] Concerto V in E major	[12] Sancte	[11] Sancte
[02] Gloria	[13] Toccata (Consolatio VI)	[13] Agnus Dei	[12] Agnus Dei
[03] Credo	[14] Prélude Op. 25/9 (G. Chapel)	[14] Fuga Allegro con moto	[13] Pafiduum
[04] Offertorium	[15] Prélude Op. 25/9 (G. Chapel)	[15] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[14] Fuga Allegro con moto
[05] Sanctus	[16] Prélude Op. 25/9 (G. Chapel)	[16] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[15] Chiesa, Chiesa, Chiesa
[06] Benedictus	[17] Prélude Op. 25/9 (G. Chapel)	[17] Fuga Allegro con moto	[16] Chiesa, Chiesa, Chiesa
[07] Agnus Dei	[18] Prélude Op. 25/9 (G. Chapel)	[18] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[17] Chiesa, Chiesa, Chiesa
[19] Variations on the basso continuo of the 1st movement of Concerto No. 13 and the Cantata from "Die Legende der	[20] Prélude Op. 25/9 (G. Chapel)	[19] Fuga Allegro con moto	[18] Chiesa, Chiesa, Chiesa
Mass in B minor	[21] Prélude Op. 25/9 (G. Chapel)	[20] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[19] Chiesa, Chiesa, Chiesa
..... 20 : 00	[22] Prélude Op. 25/9 (G. Chapel)	[21] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[20] Chiesa, Chiesa, Chiesa
CD 1 total 75 : 13	[23] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[22] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[21] Chiesa, Chiesa, Chiesa
CD 2 total 77 : 34	[24] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[23] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[22] Chiesa, Chiesa, Chiesa
CD 3 total 76 : 00	[25] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[24] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[23] Chiesa, Chiesa, Chiesa
CD 4 total 78 : 14	[26] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[25] Chiesa, Chiesa, Chiesa	[24] Chiesa, Chiesa, Chiesa

Stefan Johannes Bleicher, organ

図77 リストのオルガン曲全集の作品目録  
バッハに因む曲や宗教曲が多い。全曲集でも演奏者により、曲数が異なる。

(CD: ARTE NOVA, C P 1998)

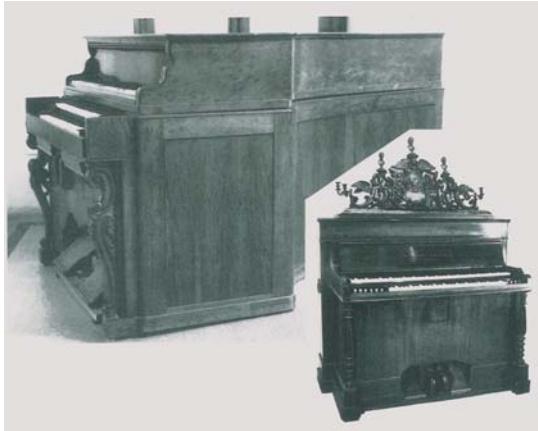


図78 リストが作曲に使った2台のオルガン  
左：1853年製の巨大ペダル・ピアノフォルテ、図75の中と同じ。  
右：1865年製のピアノ・ハーモニューム  
(Burger: F. Liszt. Princeton Univ. Press, 1989.)

グナー、ヴェルディなどの小曲の変曲もあるが、バッハの編曲も含め、多くが宗教曲で「オルガンミサ」「オルガンの為のレクイエム」等があり、アベ・リストのバッハのオルガン曲の研究などの成果が、存分に発揮されている。

図77は、ブライヒャーのオルガン全曲集の分かり易い目録である。曲数は、全集により異なる。他にサットマリーによる全集もある。

図78左のピアノとオルガンの合体した「巨大ペダル・ピアノフォルテ」は、リスト指導による、アレクサンダー・エラール製

(1853) でヴァイマールで使用。

右も同社製 (1864/65) のピアノ・ハーモニュームで、ローマとブタペストで使用。

図75右は、教会のパイプオルガンの演奏部で、複数段の鍵盤と多数のストップがみられる。

パイプオルガンは、風圧でリコーダー(たて笛)のように、パイプを鳴らす。

ストップ(ストップレバー、レジスター)で音色を選択し、鍵盤で音階の音を決定する。

複数のストップ操作により、音色の合成、倍音の合成が可能で、多彩な音色を創造。

これらリストの膨大な作品を聴けば、リストのバッハに対する敬愛の念と情熱を感じとる事ができるはずで、それはメンデルスゾーンに於ても同様である。

### • クララとロベルト・シューマン夫妻

クララ (1819-96) は、ピアノ教師の父フリードリヒ・ヴィーグの二女として生まれ、9歳でゲヴァントハウス管弦楽団と、モーツアルトのP協奏曲でデビューした。

18歳でオーストリア皇帝より、異例の「王室皇室内楽奏者」の称号を与えられ、19世紀で最も高名なピアニスト(マリー・プレイヤーがそれに次ぐ)になった。

19世紀から20世紀前半の音楽界で、高名で興味深い女性は、クララ、コジマ・ヴァーグナー、それにアルマ・マーラーである。

クララは、ロベルトとバッハを勉強し、「3つの前奏曲とフーガ」、「J.S.バッハによる3つのフーガ」、「前奏曲とフーガ嬰ヘ短調」などを書いた。これらを聴くと、自分の楽しみの為に作曲したように思われる。

ロベルトも同年、「4つのフーガ」「バッハの名による6つのフーガ」を作曲。

更にロベルトは、J.S.バッハの「無伴奏ヴァイオリンソナタとパルティータ」全6曲にP伴奏を加えた「シューマン編曲版、作品2、1852/53」を作曲している。



図79 クララ・シューマンと子供達

クララは8人の子宝に恵まれた。膝の子は仲の良いメンデルスゾーンに因み、フェリクスと名付けられた。  
(1854年の母子の写真)

なおロベルトは、パガニーニの「24の奇想曲」の最後の24番を除く23曲に、P伴奏を加えた「編曲版、作品23、1855」も作曲している。

シューマンはメンデルスゾーンと仲がよく、38年にウィーンの旧シューベルトの自宅で交響曲第8番、ザ・グレート、D944の楽譜を見つけた時には、すぐメンデルスゾーンに送り、同年、フェリクスは、ゲヴァントハウスで指揮、演奏した。フェリクスがライブチヒ音楽院を設立した時、シューマンは作曲とピアノの教師を引き受けた。

シューマン夫妻は、8人の子宝に恵まれた。クララは子育てに奮闘しながら、演奏活動に努め、ロベルトの作品の普及に努めた。

図79でクララが膝に抱いている男の子は、稀有の天分を持って生まれた仲の良いメンデルスゾーンに因み、フェリクスと名付けられた。

- プラハ生まれのユダヤ人、モシュレス(1794-1870)はフンメルと並ぶ大ピアニストで、バロックや古典派の音楽にも通じていた。

1808年にはウィーンに移り、20歳の頃には、

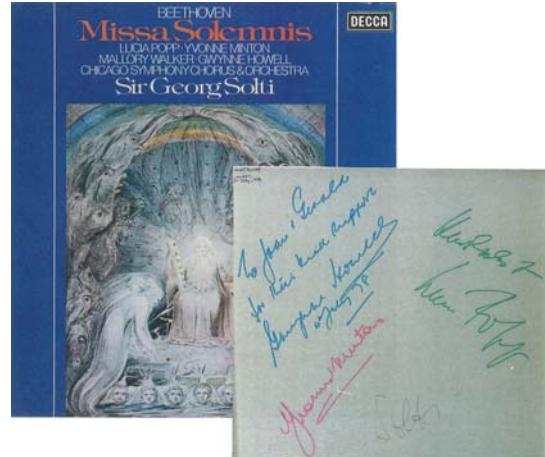


図80 ベートーヴェンの大作「荘厳ミサ曲」

モシュレスは、この曲を指揮し、ロンドン初演を行った。ここでは、ショルティ指揮、シカゴ響のLP。

(LP: DECCA, D87D2, 録音1977)

既に巨匠的存在となり、憧れのベートーヴェンの信頼も得た。

彼はその後、演奏旅行を行い、ロンドンを含め、ヨーロッパ中でピアニストとしての名声を高めた。

1824年、モシュレスはフェリクスとファニー・メンデルスゾーン姉弟の父親から、二人のピアノの教育の仕上げを依頼され、これを受けた。初めて会った時に、モシュレスは2人の才能に驚嘆している。

モシュレスは、1825年以後、ロンドンに定住し人気も得、音楽家としての名声とフィルハーモニー協会の共同監督など、英音楽界での地位も確立した。

1829年のフェリクス最初のロンドン訪問はじめ、同地での音楽家としての成功も、ほとんどがモシュレスによる御膳立てのお陰であった。

モシュレスは生涯、ベートーヴェンを尊敬し続け、彼の作品を広める事に努めた。

32年には、ベートーヴェン晩年の大作「荘厳ミサ曲」を指揮し、ロンドン初演を果している。

図80は、ショルティ指揮、シカゴ響のLP

で、ショルティ他のサインがみられる。

ショルティは、リスト音楽院出身。グラミー賞31回受賞の記録保持者でもある。

英国の音楽家は、多くが「Knight」の称号を授与され「Sir」で呼ばれる。女性は「デイム, Dame」。その夫人は「Mrs.」ではなく、敬意を表して、通常「Lady」である。1990-91のThe ALSのMembership Listでもサー・ショルティ夫人は、特別にLady Valerie Solty (London) である。他は皆、平等で、私の3つ前は、Mr. Claudio Arrow (NY), 少し後は、Mr. Alfred Brendel (London), Mr. Harold Schonberg (NY) .....。当時はまだUSSR時代で、USSRの唯一のmemberは、Mr. Shchedrin (夫人は名バレリーナのマイヤ・プリセツカヤ)，懐かしい時代であった。

モシュレスは、43年にフェリクスが設立したライプチヒ音楽院の教師を引き受け、フェリクスの死後は、音楽院長を引き継いだ。

バッハとの関わりでは、彼は「平均律」の前奏曲から10曲を選び、ピアノとチェロの為の編曲を行っている。曲は完全にロマン派風に変身し、流麗な曲集となっている(図81)。

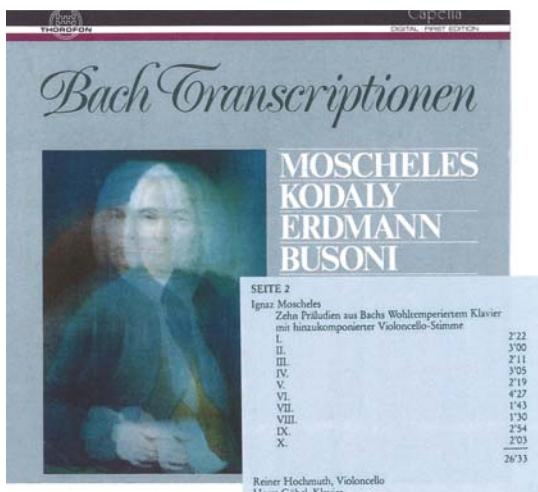


図81 モシュレスの「平均律」の編曲  
モシュレスは「平均律」より10曲の前奏曲を、ピアノとチェロのために編曲した。

(LP: THOROFON, Capella)

また彼の「24の練習曲、作品70, 1827」の第24曲は、バッハに敬意をはらい「前奏曲とフーガ」で締め括られている。

(付録) バロック期などの古楽器や演奏スタイル復興に努めた演奏家

• ワンダ・ランドフスカ (1877-1959) は、ワルシャワ音楽院を卒業後、ベルリンで高度に技巧的な「巨匠的15の練習曲」などで高名なモシュコフスキにも学んだ。

ポーランドのピアニスト達に育てられたが、ワンダの関心はバッハ、モーツアルトに向かった結果、ピアノの発展・普及により忘れ去られたチェンバロに興味を抱いた。

1912年には、プレイエル楽器店の技師を指導し、近代的チェンバロを完成。以後、その



図82 近代的チェンバロを弾くワンダとトルストイのピアノを弾くワンダ

左: 歴史的なゴルドベルグの演奏。ワンダの手指に注意 (LP: EMI, 1933録音)。

中: WW 後のアメリカ録音 (LP: RCA, 1955, 57録音)。

右: サン・ルー・ラ・フォレ (LP: EMI, 1936録音)。

下: 1909年, トルストイと (The Great Instrumentalists, Dover Pub, 1980)。

[隨筆・その他]

演奏でチェンバロの復活を目指した。

ベルリン高等音楽院チェンバロ科の初代教授を経て、25年には、パリ郊外のサン・ルーラ・フォレに古典音楽学校を設立した。

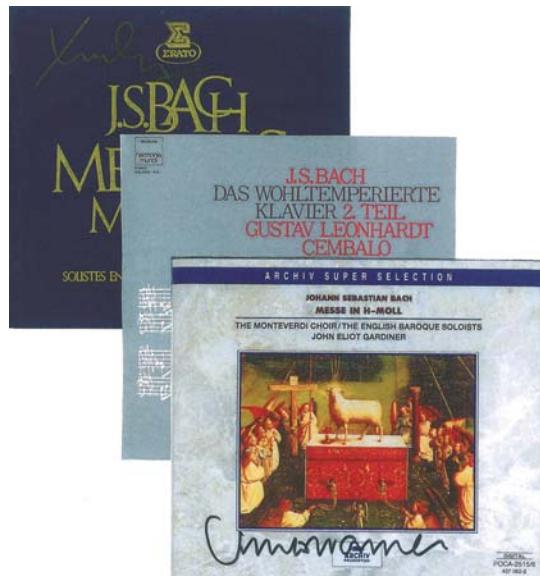


図83 時代楽器、古楽演奏スタイルの演奏家  
手前よりジョン・エリオット・ガーディナー、グスタフ・レオンハルトおよびミシェル・コルボ。

33年には、連続演奏会でバッハ以来初となる、3回のチェンバロによるバッハの「ゴルドベルグ変奏曲」の歴史的な全曲演奏を行った。バッハの名曲のチェンバロ演奏による復活である。ワンドは、20世紀で最も重要な鍵盤楽器奏者一人となった。

ワンドは、バッハはチェンバロで弾くべきという風潮を引き起こしたが、それはグールドにより破られた。

図82は、ラ・フォレの情景とチェンバロを弾くワンド。彼女の独特な手指に注意。

この指使いで、彼女は近代チェンバロに生命を吹き込んだ。

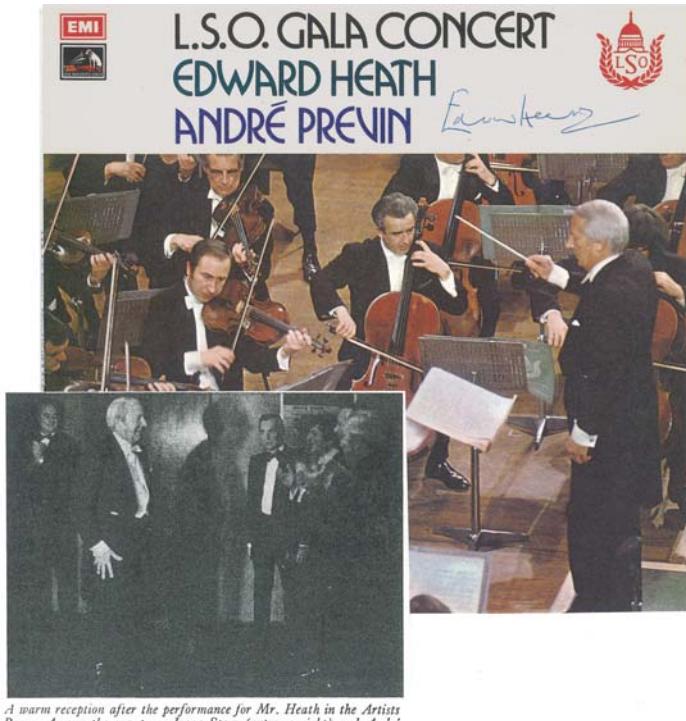
下段は、ツルゲーネフ、ドフトエフスキと並ぶロシアの文豪トルストイの自宅のピアノで演奏するワンド（1909）。この時期、既にワンドが高名であった事が分かる。

翌年、トルストイは82歳で死亡。

・古楽器やバロック期の演奏スタイルで演奏する音楽家が多い。ここでは、その一部であ



図84 時代楽器、古楽演奏スタイルの演奏家  
手前よりクリストファー・ホグウッド、ヘルベルト・ブロムシュテットおよびカール・リヒター。



*A warm reception after the performance for Mr. Heath in the Artists Room. Among the group are Isaac Stern (extreme right) and André Previn.*

#### 図85 コンサートで指揮する英首相とそのサイン

1971年、ロンドン響のガラ・コンサートでエルガーの「コケイン」を指揮するエドワード・ヒース。レセプションでのアイザック・スター、アンドレ・プレヴィン。  
(LP: EMI, 1971年11月25日)

るが、近代的演奏家の名前を列記するにとどめる(図83, 84)。

図83は、手前よりジョン・エリオット・ガディナー、グスタフ・レオンハルト(LPはチェンバロによる「平均律」)、ミシェル・コルボ。

図84は、手前よりクリストファー・ホグウッド、ヘルベルト・ブロムシュテット、カール・リヒター。

#### (コーヒーブレイク) 英首相のサイン

エドワード・ヒースは、1970-74年に英首相として在任。日本では田中首相との日英首脳会談(ロールス・ロイス・エンジン搭載のロッキード・トライスター、後にロッキード事件へ進展)などが思い出される。

1971年、ロイヤル・フェスティバル・ホールでの、ロンドン交響楽団(主席指揮者アンドレ・プレヴィン)のガラ・コンサートで彼は、エルガーの演奏会用序曲「コケイン、Cockaign (副題, In London Town)」を指揮した。この曲は、ロンドンの下町の雑踏を描寫した力作。ちなみにコックニーは、ロンドンの下町訛り(「マイ・フェア・レディ」で、イライザ役のオードリーが使っていた言葉使い。[ei]を[ai]と発音)。

図85は、演奏中のエドワード。写真は、アンドレ・プレヴィン、アイザック・スターらと、演奏会後の宴會。

(つづく)